

20世紀を中心とする学術一次資料を提供する Gale のプラットフォーム
アーカイヴズ・アンバウンド
Archives Unbound
～中東をケーススタディとして～

センゲージ ラーニング株式会社

前回に続き、Gale の歴史資料をご提供するプラットフォーム、Archives Unbound を利用したケーススタディをご紹介します。今回は、中東を例に取り上げ、Archives Unbound でどのような資料がヒットし、それらの資料からどのようなことが分かるか、一例を示します。

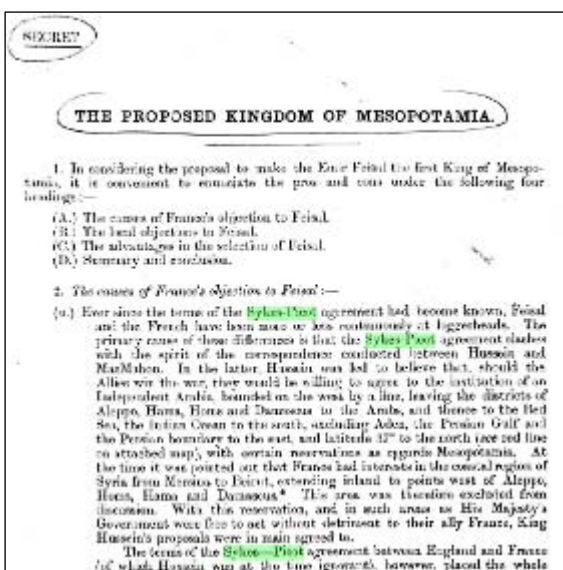
アラブの春、シリア内戦、パレスチナ問題、イラク戦争終結後も続く治安悪化、イランとアメリカの関係改善の兆し、「イスラム国」の台頭など、中東の様々なニュースが日々取り上げられています。これらの問題を理解するには複雑化するグローバルな政治経済の中で読み解くと共に、問題の起源や歴史的経緯を訪ねてみることも必要です。

現在の中東問題の起源は20世紀初頭まで遡ります。第一次大戦が勃発し、この地を支配していたオスマントルコがドイツ陣営に参戦、その一方で、イギリスとフランスが、対ドイツ戦を有利に進めることで戦後当地で一定の影響力を行使しようと、関係勢力と外交協定を結んだことが発端です。イギリスが、オスマントルコ帝国内の被支配民族であったアラブ人の独立を承認したフセイン・マクマホン協定、同じくイギリスがパレスチナをユダヤ人の郷土とすることを承認したバルフォア宣言、イギリス、フランス間で戦後の中東の国境線を定めたサイクス・ピコ協定。これらすべてが第一次大戦中に定められましたが、このうち、サイクス・ピコ協定とフセイン・マクマホン協定に焦点を当て、両協定の内容、背景、当事者たちの思惑、そして結果を Archives Unbound に収録された資料を検索し、探ってみます。



◆サイクス・ピコ協定を調べる◆

"sykes-picot" in Full Text



メソポタミア王国の提案

1. ファイサル首長をメソポタミア初代国王にするという提案を検討するに際し、以下の項目においてそのメリットとデメリットを表明することを妥当とする。

- (A) フランスがファイサルに反対する原因
(B) ファイサルに対する現地民の反対
(C) ファイサルを選ぶメリット
(D) 要約と結論

2. フランスがファイサルに反対する原因

(a) サイクス・ピコ協定の条文が周知されて以降、ファイサルとフランス人は反目しあってきた。その原因は、サイクス・ピコ協定がフセイン・マクマホン書簡の精神に反していることにある。フセイン・マクマホン書簡では、戦争に勝てば、連合国はアラブ民族の独立国家の樹立を認めるとしていた。

1921年2月17日の陸軍省の極秘(secret)文書です。サイクス・ピコ協定以降、ファイサルとフランスの関係が悪化していることが述べられています。ファイサルは、フセイン・マクマホン協定の当事者の一人で、アラブ民族の有力者フセインの息子です。それでは、ファイサルとフランスの対立は、具体的にはどのようなものだったのでしょうか。

同じページに次の記述があります。

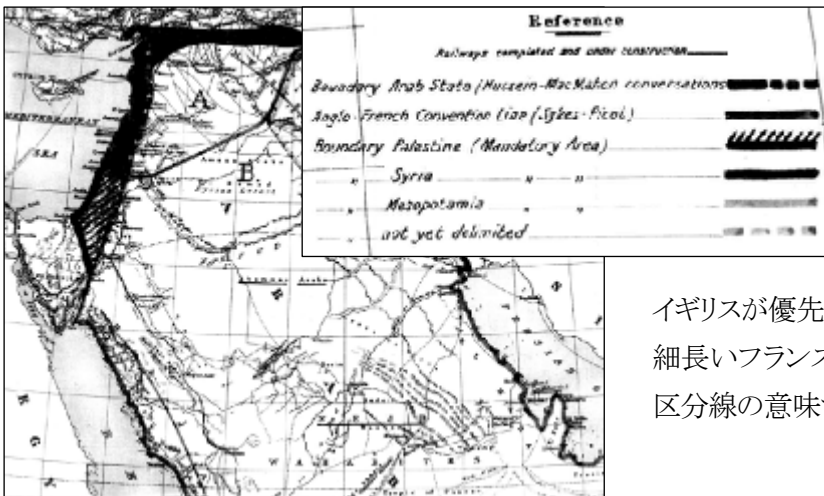
The terms of the **Sykes-Picot** agreement between England and France (of which Hussein was at the time ignorant), however, placed the whole of the Northern area of Hussein's Independent Arabia under foreign influence, and this was sub-divided into :-
 (i) The French coastal region marked blue on map.
 (ii) Area "A" where France had priority of interest. (See map.)
 (iii) Area "B" where His Majesty's Government had priority of interest. (See map). Southern boundary, i.e., dotted line, was never definitely fixed.
 According to this agreement an independent Arab State was to be set up throughout Arabia, the French having priority of appointing advisers in Area "A" and British in "B" if asked for by the Arabs, but difficulties arose as regards the boundary between the French Area (Blue) and Area "A" which culminated in the French ejecting Feisal from Damascus (which is in Area "A") by force of arms.
 The foregoing is a brief précis of the events which led up to Feisal's fall, and since he still wields considerable influence over the tribes bordering the French sphere, it is not surprising that he is considered by the French as a potential enemy.

しかしながら、英仏間で締結されたサイクス・ピコ協定は、フセイン率いる独立アラブ国家の北部領域を外国の支配下に置くことを定め、それらの地域は以下の3つの区域に分けられた。

- (i) 地図上で青く塗られたフランス領沿岸地域
- (ii) フランスが優先的の利害をもつ A 地域
- (iii) イギリスが優先的の利害をもつ B 地域

同協定によれば、アラブ民族独立国家はアラビア半島一帯に建国され、A 地域はフランスが、B 地域はイギリスが優先的の利害をもつものの、青く塗られたフランス領と A 地域の境界線を探り、フランスとアラブ人との間で紛糾し、ついに、フランスはファイサルをダマスカス(A 地域に属する)から武力で追放するに至った。

以下は、文書に添付された地図です。



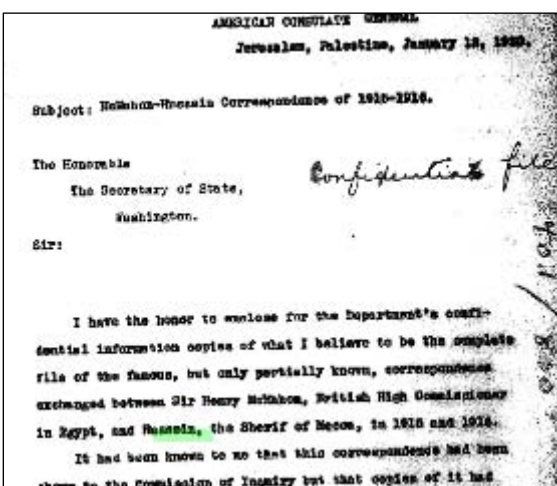
現在のシリア、レバノン、イラク、イラン西部、サウジアラビア、ヨルダン、イスラエルをカバーしており、サイクス・ピコ協定で定められた、フランスが優先的の利害をもつ A 地域、

イギリスが優先的の利害をもつ B 地域、左上に黒く塗られている細長いフランス領(実際には青色)が示され、地図の右上に、区分線の意味するところが述べられています。

- ・アラビア半島を囲む太い実線＝フセイン・マクマホン協定で定められたアラブ国家の境界線
- ・A 地域と B 地域を隔てる実線＝サイクス・ピコ協定による英仏境界線
- ・地中海沿岸の細長いフランス領の南部の斜線地域＝パレスチナ委任統治領

この地図には、フセイン・マクマホン協定とサイクス・ピコ協定という二つの歴史的協定が描かれています。極秘文書の記述と照らし合わせると、協定締結直後のアラブ地域をめぐるイギリス、フランス、アラブ民族の思惑が伝わってきます。前ページで紹介した極秘文書の前半部分ではファイサルとフランスの対立が、単に二つの外交協定が矛盾し合っていることに原因があるとされていましたが、地図を参照することで、どの地域を巡る争いだったのかが明確になります。

◆フセイン・マクマホン協定を調べる◆



國務長官閣下
 拝啓
 有名でありながら、部分的にしか知られていない、エジプト駐在イギリス高等弁務官サー・ヘンリー・マクマホンとメッカ知事(シェリフ)フセインが 1915 年から 1916 年にかけて交わした往復書簡の完全ファイルの写しを、國務省の機密情報のために同封いたします。

この米国國務省の外交文書の中で、駐パレスチア米国総領事、Paul Knabenshue が國務長官にフセイン・マクマホン往復書簡の写しを送ったことが報告されています。送付された年代が判読しにくいですが、

おそらく1930年頃と思われます。

"Subject to the above modifications, Great Britain is prepared to recognise and support the independence of the Arabs within the territories included in the limits and boundaries proposed by the Sherif of Mecca."

上記の修正を行なった上で、イギリスはメッカ知事より提案された国境線内に含まれる領域内におけるアラブ人の独立を承認し支持する用意がある。

マクマホンからフセインに宛てられた
1915年10月24日付書簡(部分)

◆フセイン・ファイサルら関係人物の写真を検索する◆

ところで、フセインやファイサルとはどのような人物なのでしょう。人物をイメージするには、写真が便利です。

faisal in Full Text
photograph in Keyword



左の写真は1923年11月19日にバグダッドで撮影されたものです。前列の椅子に腰かけている3人が、フセイン・マクマホン協定の一方の当事者フセインの三人の息子(左から、イラク国王ファイサル1世、トランスヨルダン首長アブドゥッラー、アリ)です。アブドゥッラーは現在のヨルダン国王アブドゥッラー1世の曾祖父です。

右の写真は第一次世界大戦の講和会議が開かれたヴェルサイユで撮影されたもので、会議に派遣されたファイサル代表団と顧問一行です。中央がファイサルです。後方右から3人目の人物は、T.E.ロレンスです。「アラビアのロレンス」と呼ばれる伝説的人物で、第一次大戦中はイギリスの軍人としてアラブ民族の反乱を支援、講和会議にはファイサルの顧問として参加しました。

◆ロレンスに関する記事を検索する◆

次にロレンスに関する記事を検索してみます。ロレンスの当時の階級は大佐(colonel)です。

"colonel lawrence" in Document title

The prospect of Col. Lawrence's return to Paris to meet Faisal is regarded with grave misgivings & he is held to be largely responsible for our trouble with the French over Syria.
In any case it is considered desirable that he should be definitely under the orders of the W.O. & the Peace Delegation.

ロレンス大佐がファイサルに会うためにパリに戻ることに、重大な懸念が投げかけられている。ロレンスは、シリアをめぐる我が国とフランスが紛糾している原因と見なされている。いずれにせよ、ロレンスは陸軍省が講和会議代表団の命令の下に行動しなければならぬ。

パリ講和会議時のイギリス外務省の書簡

書簡では、ロレンスがシリアを巡る英仏間の紛糾の原因とされています。先にサイクス・ピコ協定の資料を紹介したときに、ファイサルとフランスが対立していたという記述がありましたが、ファイサルの盟友であるロレンスも、フランスと対立し、英仏の同盟関係に亀裂を生じかねないという懸念がイギリス政府内で生じていることが分かります。そして、シリアとは、先にサイクス・ピコ協定に関して紹介した文書の中で「フランス領沿岸地域」と「フランスが優先的利害をもつ A 地域」に該当します。フランスが領土的関心をもつ地域をめぐる英仏間の紛糾の原因が、他でもなくロレンスであるとされているのです。

1. No authoritative statement as to the cause of the outbreak has as yet been made (e.g., the Prime Minister in the House of Commons on 22nd July: "I really do not know what the causes of the outbreak are"); but, perhaps as a result of Colonel Lawrence's letters to the *Times* and other papers, the general opinion seems to be that we are fighting against Nationalists who are demanding only a form of Government that shall be reasonably independent and British-advised.

(メソポタミアの)反乱勃発の原因について、いまだに説得力のある説明はなされていない。(7月22日、庶民院で首相は「反乱勃発の原因を把握していない」と発言している。)しかし、おそらくロレンス大佐のタイムズ紙への投稿他から判断すれば、イギリスは民族主義者と戦っているのであり、彼等はイギリスの諮問の下、独立政府の樹立を要求している、というのが大方の見解であろう。

1920年8月にインド省内で閲覧された極秘(Secret)文書

同年6月にメソポタミアで勃発した反英暴動の原因をめぐる議会で論議が巻き起こっていたこと、ロレンスのタイムズ紙への投書によってアラブ民族反乱の原因とその要求が判明しつつある状況が述べられています。

Archives Unbound から離れますが、Gale のデータベース、The Times Digital Archive でタイムズ紙の該当記事を参照してみます。

ARAB RIGHTS.

OUR POLICY IN MESOPOTAMIA

COLONEL LAWRENCE'S VIEWS.

TO THE EDITOR OF THE TIMES.

Sir,—In this week's debate in the Commons on the Middle East a veteran of the House expressed surprise that the Arabs of Mesopotamia were in arms against us despite our well-meant mandate. His surprise has been echoed here and there in the Press, and it seems to me based on such a misconception of the new Asia and the history of the last five years, that I would like to trespass at length on your space and give my interpretation of the situation.

The Arabs rebelled against the Turks during the war not because the Turk Government was notably bad, but because they wanted independence. They did not risk their lives in battle to change masters, to become British subjects or French citizens, but to win a show of their own.

Whether they are fit for independence or not remains to be tried. Merit is no qualification for freedom. Bulgars, Afghans, and Tibetans have it. Freedom is enjoyed when you are so well armed, or so turbulent, or inhabit a country so thorny that the expense of your neighbour's occupying you is greater than the profit. Feisal's Government in Syria has been completely independent for two years, and has maintained public security and public services in its area. Mesopotamia has had less opportunity to prove its armament. It never fought the Turks, and only fought perfunctorily against us. Accordingly, we had to set up a war-time administration there. We had no choice; but that was

中東に関する今週の庶民院の議論で、あるベテラン議員より、イギリスの委任統治が順調であるにも関わらず、メソポタミアのアラブ人がイギリスに対して武装蜂起したことに対して、驚きの念が表明された。議員の驚きは新聞報道の至るところでこだましているが、私にはそれが新しいアジアと最近5年間の歴史の誤解に由来するものと思われるため、この場を借りて中東情勢についての私の解釈を披歴したい。戦時中、アラブ人がトルコに反乱したのは、トルコ政府が悪政を施していたからではなく、彼らが独立を欲していたからである。アラブ人が生命の危険を冒してまで闘ったのは、主人を変え、イギリス王の臣民になるためではなく、自らの独立を勝ち取るためである。アラブ人が独立国家をもつに相応しいかどうかは、今後問われるであろう。美質だけで自由を獲得することはできない。ブルガリア人もアフガニスタン人もタチ人人も美質を有している。……シリアにおけるファイサルの政府は完全に独立を達成して2年が経過し、今では政情は安定し、公共サービスが提供されている。

1920年7月23日付、タイムズ紙に掲載されたロレンスの投書
「アラブ民族の権利: メソポタミアのイギリスの政策」

THE SYRIAN QUESTION.

TO THE EDITOR OF THE TIMES.

Sir,—Your Syrian Correspondent has just referred to British promises to the French and the Arabs. When on Prince Feisal's staff I had access to the documents in question, and as possibly the only informed free-lance European, I may help to clear them up. They are four in number.

DOCUMENT I.—The British promise to King Hussein, dated October 24, 1918. It undertakes, conditional on an Arab revolt, to recognize the "independence of the Arabs" south of latitude 37deg., except in the provinces of Baghdad and Basra, where British interests require special measures of administrative control, and except where Great Britain is not "free to act without detriment to the interests of France."

[N.B.—Hussein asked for no personal position, and for no particular government or governments.]

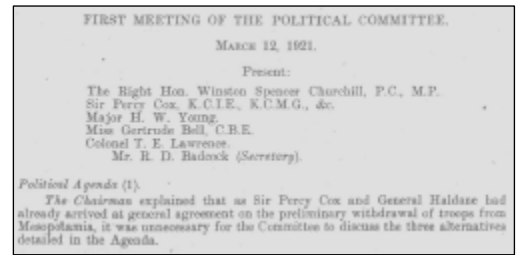
DOCUMENT II.—The Sykes-Picot Agreement made between England and France in May, 1916. It divides the Arabic provinces of Turkey into five zones, roughly—(a) Palestine from the Jordan to the Mediterranean, to be "international"; (b) Haifa and Mesopotamia from near Tehrat to the Gulf to be "British"; (c) the Syrian coast, from Tyre to Alexandretta, Cilicia, and most of Southern Armenia, from Sivas to Diarbekir, to be "French"; (d) the interior (mainly the provinces of Aleppo, Damascus, Urfa, Deir, and Mosul) to be "Independent Arab" under two shades of influence:—

(1.) Between the lines Akaba-Kuwait and Haifa-Tebriz, the French to seek no "political influence," and the British to have economic and political priority, and the right to supply "such advisers as the Arabs desire."

1919年9月11日付、タイムズ紙に掲載されたロレンスの投書
「シリア問題」

「シリアにおけるファイサルの政府は…政情が安定し」とある通り、ファイサルがシリアを統治していた頃の記事です。この後、ファイサルはフランスによりシリアを武力で追放されます。おそらくロレンスとしては、盟友ファイサルのシリア統治を後押しするために、タイムズ紙という媒体の力を借りて世論を喚起しようとしたのでしょう。

Archives Unboundに戻り、もう一つ、ロレンス関連の記事を紹介します。1921年3月にカイロで、中東とイラクの将来を論議するための会議が開催され、ロレンスも参加しました。右は、その時の会議の記録です。会議を主宰したのは、出席者名にも名前が挙がっているウィンストン・チャーチル。当時は植民地大臣でした。



◆カイロ会議の資料を検索する◆

cairo conference in Document title

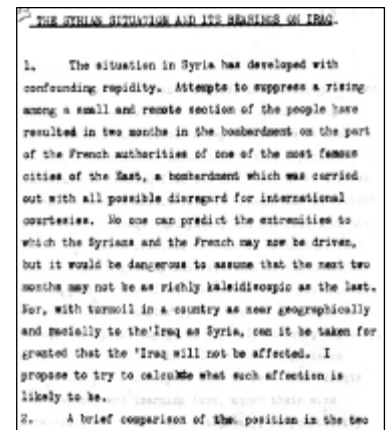


ロレンスが参加したカイロ会議に関する資料を検索してみると、写真がヒットします。カイロ会議に参加した人々の集合写真です。中央にいるのがチャーチルです。

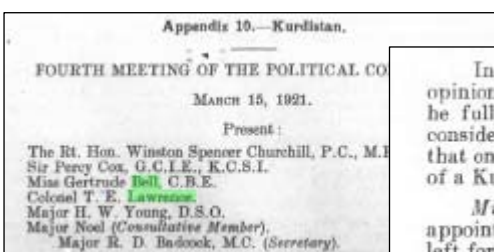
◆ガートルード・ベルに関する資料を検索する◆

ところで、カイロ会議の集合写真の左の方に帽子を被った女性が写っています。この人は、先に紹介した1921年3月12日の会議の参加者としてチャーチルやロレンスとともに名前の挙がっていたガートルード・ベルです。そこで、ベルに関する資料を検索してみます。

gertrude bell in Document title



ガートルード・ベルは考古学者として中東各地を探検し、アラビア語を操り、アラブの文化と民族に精通していた才媛です。アラブに関する豊富な知識を持つベルは、第一次大戦が勃発すると、イギリス政府から顧問として招請され、様々な助言を行ないました。左上の写真は1910年、政府の職に就く前に撮影されたものです。右上の文書は「シリア情勢とイラクに対する関係」と題した1925年11月3日付のベルの報告です。



In reply to a question by the Chairman, *Colonel Lawrence* stated that it was his opinion that the Kurds should not be placed under an Arab Government, although he fully realised that the latter would endeavour to arrange this. He did not consider it desirable that there should be two Mutesarrifs in the area, and suggested that one should be appointed, though he should not necessarily be given the position of a Kurdish prince.

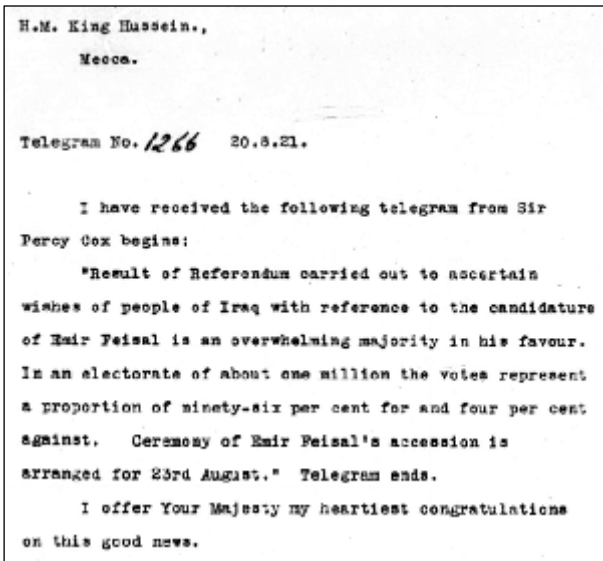
Miss Bell did not agree with the suggestion that one Mutesarrif should be appointed for the two divisions. She suggested that the whole position should be left for a further period of about six months, after which she was of the opinion that the Kurds would be anxious to join the Iraq Government.

カイロ会議では、クルド人の地位もテーマになりました。クルド人問題を巡っては、ロレンスとベルの間で意見の対立があったことが、会議の記録から分かります。

◆イラク王国成立に関する資料を検索する◆

最後に、ファイサルを国王としてイラク王国が成立した事情を伝える文書をご覧ください。

faisal in Document title ▼



フセイン王閣下

パーシー・コックスから以下の電信を受信しました。
「ファイサル首長を国王に選出することに関するイラク人民の意思を確認するために実施された住民投票は、圧倒的多数がファイサル首長の国王選出を指示する結果に終わる。96%が支持し、4%が反対を表明。ファイサル首長の国王就任式典は、8月23日に行われる予定。」
衷心より閣下にお祝い申し上げます。

1921年8月20日付、フセイン宛、イギリス領事の書簡

イギリス領事からフセインに宛てられた、ファイサルのイラク国王選出を知らせる書簡です。イラクはイギリスの委任統治の下、ファイサル国王の下、イラク王国を形成、1930年代にはイギリスからの独立を果たし、中東政治の一角を占めるに至ります。

以上、1915年から1916年にかけてサイクス・ピコ協定、フセイン・マクマホン協定が結ばれてから、1921年にファイサルがイラク国王に選出されるまで、芋づる式にデータベースで検索しながら、この時代の中東情勢の当事者たちの行動や発言を記録する資料を見てきました。わずか5年ほどの期間ですが、イギリス、フランスのヨーロッパ諸国とアラブ民族が協力しつつ、他方で確執しあっていた状況が資料から見えてきます。第一次大戦後の中東分割案を示した地図が出てきましたが、当時の外交文書に添付された地図であるだけに、生々しさが伝わってきます。外交当局者の中で極秘に交わされた書簡に見られるストレートな表現に接することで、当時の外交の現場に立ち会うかのような臨場感が得られます。

◆収録コレクションのご紹介◆

今回、ご紹介した資料は、Archives Unboundの以下のコレクションに収録されています。

イラク 1914-1974年—英国外務省・植民地省・陸軍省・内閣旧蔵資料

The Middle East Online: Iraq 1914-1974

1914年のイギリス・インド合同軍のバスラ占領から、第一次世界大戦後のイギリス委任統治領時代、1932年の独立に始まる王政時代を経て、1957年のクーデタによる共和制の成立、1963年のクーデタによるバース党政権の成立、サダム・フセインが権力を掌握する1974年までの60年間の現代イラク史に、イギリス外務省、植民地省、陸軍省、内閣の各政府省庁が所蔵する包括的な一次資料から光を当てます。イギリスの対イラク外交政策の大まかな輪郭だけでなく、行政、外交、原油・武器取引等に関わる細部の事実を含め、現代イラク形成過程の全貌がイギリスの資料を通して浮かび上がります。

【関連コレクション】

第一次大戦中のメソポタミアにおけるイギリス軍 1914-1918年—英国インド省メソポタミア局旧蔵資料

British Campaign in Mesopotamia, 1914-1918

インド省メソポタミア局に収蔵された電信、書簡、会議録、覚書、機密文書を包括的に提供します。

アラブ・イスラエル関係 1917-1970年—英国外務省、植民地省、陸軍省、内閣旧蔵

The Middle East Online: Arab-Israeli Relations, 1917-1970

1917年のバルフォア宣言から1948年のイスラエル建国を経て、1970-1971年の”Black September war”に至るまで、約50年間に及ぶアラブ・ユダヤ（イスラエル）関係史をイギリスの外務省、植民地省、陸軍省、内閣が所蔵する関係資料を収集します。

フランスのレバノン委任統治領、キリスト教徒とイスラム教徒の関係、ベイルート駐在アメリカ領事館、1920-1941年—米国国務省旧蔵

The French Mandate in the Lebanon, Christian-Muslim Relations, and the U.S. Consulate at Beirut, 1920-1941

ベイルート駐在アメリカ領事館と国務省の間で交わされた書簡と電信を収録します。収録資料は、アメリカ国民の保護、貿易、船舶、移民等の領事館の通常業務を超え、1925年のドルーズ派の反乱、キリスト教徒、マロン派、イスラム共同体の間の三つ巴の紛争、フランス軍による鎮圧、フランスが推進したベドウィンのシリア定住政策、民族主義団体と反乱、反シオニズム運動、都市と農村における暴動、1936年のフランス・レバノン条約の失敗、1939年のシリアにおける新しい委任統治領の形成、シリア独立に対するパレスチナの見方など、広範囲に及びます。

英国パレスチナ委任統治領、アラブ・イスラエル関係、エルサレム駐在米国領事館、1920-1944年

The British Mandate in Palestine, Arab-Jewish Relations, and the U.S. Consulate at Jerusalem, 1920-1944

エルサレム駐在米国領事館と国務省の間で交わされた書簡と電信を収録します。収録資料は、アメリカ国民の保護、貿易、船舶、移民等の領事館の通常業務を超え、パレスチナ人の他のアラブ諸国との関係、イギリスの政策、パレスチナと外国のシオニズム運動、パレスチナにおける共産主義、イスラム会議、人種と宗教に関わる暴動、聖地問題、ユダヤ人とアラブ人の関係など、広範な主題に及びます。オスマン帝国が瓦解し、イスラエル国家もまだ成立していない戦間期から第二次大戦末期まで、パレスチナが一見混沌とした状況に置かれていた時代に何が起こっていたのかを知る上で重要な資料を提供します。

【関連データベース】

The Times Digital Archive

世界的に有名なイギリスの高級新聞ロンドン・タイムズを創刊号より2009年※（2015年5月現在）まで誌面イメージで収録します。

※2016年には2010年まで、2017年には2011年までと、毎年1年分ずつ閲覧可能年が増えていきます。The Times Digital Archive については、KINOLINE 誌 vol.36, no.1 January 2015 「[The Times Digital Archive ～タイムズ・デジタル・アーカイブ～](#)」をご参照ください。

掲載商品のすべてのコンテンツと機能をお試しいただける1ヵ月の無料トライアルを受け付けております。掲載の商品・サービスに関するお申し込み、お問い合わせは、株式会社 紀伊國屋書店 学術情報商品部 雑誌・電子商品課（電話：03-6910-0518、ファクス：03-6420-1359、e-mail：online@kinokuniya.co.jp）までお願い致します。

お預かりした個人情報は、弊社規定の「個人情報取扱方針」<http://www.kinokuniya.co.jp/06f/gaivo6.htm> に則り、取り扱わせて頂きます。